

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成年 9月 19日	
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ専攻・修士課程1回生
氏名	横塚 彩

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
コンゴ民主共和国、赤道州ワンバ村
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ボノボと地域住民の相互作用に関する調査 (1回目)
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成26年 8月 17日 ~ 平成26年 9月 17日 (32日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
CREP, WCBR (Wamba Committee for Bonobo Research)
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>・はじめに 2014年8月17日から9月17日までコンゴ民主共和国赤道州ワンバ村にて、ボノボと地域住民の共生関係に関する調査を行った。初めての調査であったため、今回は具体的なテーマ設定のため、ボノボ調査への同行、ワンバリサーチステーションを拠点に近隣村の訪問、村の市場の視察や、ボノボ研究者や、トラッカーへの聞き取りなどを中心に行った。また当初の予定では12月10までの予定であったが同州内の村でのエボラ出血熱発生のため約1ヶ月の調査となった。</p> <p>・調査地に行くまでの Question 日本で、ワンバ地域に関する報告書や渡航者などに話を伺うと、地域住民とボノボのインタラクションはないとよく耳にした。私は、ボノボと地域住民がどのようにお互いに影響を与え合っているのかについて調査したいと思っていたので、ボノボと地域住民のインタラクションが本当はないのか、ボノボと人の間にいったい何が起きているのかについて関心があった</p> <p>・具体的に行ったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボノボ調査への同行</li> <li>・子供の採集活動同行</li> <li>・ボノボ研究者、トラッカーからの聞き取り</li> <li>・近隣村への訪問、滞在</li> <li>・市場の視察</li> </ul> <p>・霊長類研究所徳山さんのボノボ調査に1日同行させていただき、ボノボの観察を行った。私が観察したボノボの集団は、ガンダ(採集活動のために住民がたてる簡易住居)に興味を持っており、人がいないのを見計らい、森から開けたガンダに出るという行動を見せた。このようなことは珍しいとのことだったが、ボノボと地域住民のインタラクションを自分の目で見る事ができ、相互作用は「ない」と言い切れるほど、少ない回数で起きているわけではないと実感した。</p> <p>・また、リサーチステーション近くに住む子供の採集活動に同行し、森と一緒に歩いた。彼らはベイヤという食用植物の採取で森に入っていた。森の植物に詳しく、植物名やその植物がボノボも食べるのか、どのように食べるのかなど、詳しく教えてくれた。森と一緒に歩いていると、「ボノボはこんな鳴き方する」など、ボノボに遭遇した時の話などもしてくれ、ワンバ地域においてボノボが地域住民にとって珍しい存在ではないのではないかと考えた。</p> <p>・ボノボ研究者や、トラッカーの方々から話を聞くのは、非常に参考になった。ほぼ毎日ボノボの行動をトラッキングしているので、採集で森に入った子供とボノボが遭遇した話や、道にでること、畑荒らしの話など色具体的なインタラクションの事例をいろいろと聞く事ができた。</p> <p>・アソシエーション研究を行っている日本人研究者に同行して、近隣村の訪問も行った。私は今回はほとんど言葉ができない状態だったので、聞きたいことを訳していただきながら、ワンバ以外の村の人々がボノボに対してどのような意識を持っているのか少し聞く事ができた。</p>

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

・3つの村での市場の視察を行った。ワンバとイヨンジでは週1回市場が開かれる。ワンバの市場はこじんまりとしていて、販売されているものもかなり少ないが、イヨンジでは、医療品なども販売されていた。また、保護区内で銃使用の規制があるにも関わらず、イヨンジの市場では散弾銃の銃弾が市場にでていた。ワンバから80km離れたジョルという町では毎日市場が開かれている。店の数も多く、獣肉を売る店もある。並べられた肉を見ると、ヤギや豚などの家畜の肉もあったが、クチヒゲグエノンやダイカーなど、ブッシュミーと思われる肉も並べられていた。セマは保護区外だが、保護区内外でのブッシュミーの流通量の違いなども気になった。

### ・今回の調査で分かった事

ボノボと地域住民に関する相互作用は直接的なものも間接的なものもあるということがわかった。また、村をいくつか訪問したことで、ボノボが比較的近くに生息する地域（ワンバ）と遠くに生息する地域（イヨンジ）での人々のボノボに対する見方の違いなども少し分かったように思う。私が調査地に入った時期は、ICCN（国の環境省のようなところ）と地域の人々の間で軋轢が生じていた時だったので、外部アクターと地域住民との関係性がボノボの保全とどのようにリンクするのか関心をもった。

### ・今後の予定

今回は1ヶ月と、当初の予定よりもかなり短い調査期間となったが、関心のあるテーマをいくつか見つけることができたので、PWS 指導教員や ASAFAS の先生とも方向性の相談しながら、類似研究や、調査地域に関する知識に厚みを増していきたいと思っている。また、言葉の習得は不可欠なので、日本にいる間にできる限り習得していきたい。



▲ガンダに出たボノボ。ガンダは周辺の木々を切り倒して開けた土地になっている



▲ベイヤとりの子どもたちと同行。植物や罨にも詳しく小さくても私の森の先生になった

## 6. その他（特記事項など）